美女に勝てない善人

裏表ユイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
美女に勝てない善人

【Ｎコード】
Ｎ１４３９ＢＡ

【作者名】
裏表ユイ

【あらすじ】
高校生になった平凡・不憫・ツッコミ属性の前田　善。教室に入ると、目の前には美少女が。その美少女は、中学二年の終わりに善を助けてくれた…
善が一目惚れした少女だった。善は、入学して一週間もたたない内に、美少女に告白した。しかし、その少女の本性は…ドＳだった…。他人の前では猫被りのドＳ美少女。人が善い為か美少女にこき使われる主人公。「ｗｗｗ」しか言わないへのへのもへじのお面をつけている主人公の幼馴染。

今日も善は、二人を抑えられるのか！？

「何でこんな目に遭うんだろう…（泣）」ｂｙ主人公

マ エ ガ キ by作者（前書き）

これは、一種のプロローグみたいなものです。
本文は始まっていません。タイトルの通りの章です。

後に関わって来る（というより、最後の最後にしかないかもしれない）ので、
読んでも読まなくてもどちらでも結構です。

それでわ、どうぞ←

マ エ ガ キ　ｂｙ作者

僕は、作家だ。名前は…あるけどここでは教えられない。
作家になってお話を書くのは、小さいころからの夢だった。
いや…正確に言うと、このお話を書こうと思ったのは、大学生。
僕の…大切な大切な三年間の思い出。それを残したかった…。
この思い出を、僕が忘れないために。
仲間が、忘れても思い出せるように。
そして…僕の、いや、僕らの軌跡を残すために…

「何…してるの？」

僕の妻が来たようだ。

「僕らが出会った…あの三年間を残そうと思って」
「ああ…懐かしいな…」

そういって微笑む妻。美人なだけに、絵になっている。

これは…僕たちだけの…物語。

マ　エ　ガ　キ　ｂｙ作者（後書き）

短いですか？
初めて書いたのと、最後の複線ということで、勘弁してください。

名乗り遅れました。自分、新人の裏表ユイと申します。
以後、宜しくお願いします。

再度いいますが、この複線は、本当に最後の最後にしかないかもしれません。
なので、スルーしてくださって結構です。

がんばりますので、宜しくお願いします。

一目惚れは最悪です…　ｂｙ奴隷一号（前書き）

サブタイトルの名前の部分は毎回変わります。
その話にあった名前にしていこうと思っているので、がんばってだれか当ててみてください。

それでわ←

一目惚れは最悪です…　ｂｙ奴隷一号

今日は高校の入学式。何度体験しても、このドキドキは止まらない。
バーコードの校長先生の催眠術師じゃないのっていう長いお話を聞き、僕はクラス表の所へ向かった。
――――1年2組か――――
僕はそう思い、自分のクラスへ向かう。
なんともない高揚感と期待感に教室に向かう足取りは軽い。そんなことを考えていたら、教室の扉の前についた。　ガラガラッ　と音を立てて扉を開けるとそこには…美少女がいた。
茶髪で腰まであるポニーテール。そのポニーテールを縛ってあるリボン。少々釣り目気味な目も、意思の強さをあげさせている。
そして何より…僕が一年前に一目惚れした少女だということだ。

「こんにちわ。私、女美（じょみ）　優子（ゆうこ）といいます。これから宜しくお願いしますね？」
「はっ、はい…。あっ！ぼっ、ぼく、前田（まえだ）　善（ぜん）といいます…。よろしく…」

照れていた僕は、そのとき気がつかなかった…。
女美さんが、悪魔の様な微笑みを…浮かべていることに…。

△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽

僕は、女美さんに告白した。
早い？そんなことはない。だって、一年間も思い続けていたんだ。
一年ぶり（といっても、向こうが覚えているかはわからないけど）に好きな人を見たんだ。

思いが募っているのに告白しない手はない！ということで…

「付き合ってください！！」

一秒…二秒…三秒…時間が過ぎるのが、とても遅く感じる。
僕、小さいころから本番に緊張するタイプなんだ…。覚悟を決めたのに、今とても不安です…
すると、女美さんが何かをいった

「あっ……！」
「『あ』？」
「あっはははははは！はははははは！！」

突如、女美さんが笑い出した。
…えっ！なんか変な薬でも飲んだ！？それとも笑い茸！？それともそれとも…
一番最初に結論を出したのに慌て、なんでこうなったのか原因を探っていると、笑い声が止んだ。

「だっ、大丈夫！？女美さん！」
「はあ？意味わかんねぇこというなよ。俺に告白してきた馬鹿がいたから笑っただけだけ　ど？」

いや、そっちの方が意味がわからないですから！ってか…え？前からこの声が聞こえてくるけど…まさか女美さんがいってるはず…ないよな…？

「信じられないって顔してるな。まあ、そうだろ。俺の演技は完璧だかんな！」

自信満々に言う女美さん。
まさか…本当に女美さんなのか…？

「まあ、信じるも信じないもお前しだいだ。久しぶりに面白いもん見してもらった。じゃなっ！」

そういって去って行く女美さん。ふと、何かを思ったのか、こっちを向いてこういった。

「明日から俺の奴隷な？」

その後、僕は十五分くらい唖然としていた…

△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽

告白の翌日

――――そんなはずはない。そんなはずはない。そんなはずはない。――――

僕は、現実逃避をしながら学校に来た。
昨日の夜は、寝たらきっと夢なんだと信じて寝たけど…不安だ。
きっと夢だ…！という期待をこめ、教室を開けると…

「よっ！奴隷一号クン？」

夢じゃ…なかったようです…

一目惚れは最悪です…　ｂｙ奴隷一号（後書き）

このお話、実は親友の蒼（仮）と一緒に作ったものなんです。
そうはいっても、最初の部分とキャラクター以外は別々でやってます。
蒼はうごめもで書いているんですが、パソコンができません。
私はパソコンで書いているんですが、うごめもができません。
なので、キャラクター以外は別々です。
一緒の所もありますけどね。

これからも（読んでくれる方がいたら）ぜひ読んでください。

ティータイムの…始まりです…♪　ｂｙ紅桜（前書き）

Ｒ１５ではないと書いてあるんですけど、血とか書いてあったら、Ｒ１５指定にしたほうがいいですか？
とりあえず今回は忠告で。

今回のお話は、Ｒ１５が含まれている可能性があるので、苦手な人はブラウザバックしてください。

必要だったらＲ１５指定するので言ってください

それでわ←

ティータイムの…始まりです…♪　by紅桜

横には、仁王立ちした女美さん。
その目の前には違う学校の制服を着ている不良らしき人。
そして、女美さんの横にいる…かばんを二つ持っている僕。

どうしてこうなった…

僕が、女美さんの奴隷一号（認めたくないけど）になって数日がたった。
その日、僕は女美さんのかばんを持たされ、女美さんの後について下校していた。
そのまま何もなく無言で道を歩いていると…路地裏からぞろぞろと不良っぽい人が…
って、あの人達完璧不良じゃないの！？
ってか、その前に、あの路地裏って行き止まりなんだけど、どうやってそんな人数が入ったの！？
僕がそんなくだらないこと（僕にとってはすごい不思議だけど）を考えていると、女美さんと不良（もう面倒くさいからこれでいいや）のリーダーっぽい人が話していた。

「よう。嬢ちゃん。何してるんだ？」
「こんにちわ。あなた方こそ何を？」

猫被り女美さん。よく学校でみるけど、猫被りしてると妙に寒気がするんだー…。
この寒気に気がついていれば……

「あぁ？…俺らは、紅桜（べにざくら）って奴を探しているんだ。嬢ちゃん知らないか？」
「ッ！！…なんですか？その…紅桜って」
一瞬、女美さんの顔が歪んだ気がしたのは気のせいか…？
「まっ、普通知らないよな。それより嬢ちゃん。これから俺たちと遊ばないか？そんな後ろのひょろっ　こいのなんかほっといてさ～」
ひょろっこいの！？ひょろっこいのって僕のこと！？たしかに中学生のころはひょろとか男子にいわれてたけどさー…
「ごめんなさい。私そういうのにはあまり…」
「まぁまぁ。いいじゃねぇか少しくらい」
そういって女美さんの腕をとって強引につれていこうする。いくら猫被りだって、女美さんは女性だ。強引につれていっていいはずはない！それに、ちょっと青筋がたっててぼれそうだし…
「やめてあげてください！嫌がってるじゃないですか」
「あぁ？邪魔だよ！」バンッ
やめてくださいといってみたが、そのままなげだされてしまった。
ああ……。女美さんがそろそろ…
「……せんだよ……」
「なんだ？やっとOKしてくれたのか？やっぱこんなひょろ」「うっせえんだよ！」！？」ゴッ

あ〜あ…女美さんを怒らせちゃったよ。華麗に不良リーダーの顔面に吸いこまれていったこぶしは、不良リーダーさんを吹き飛ばした（といっても、少し浮いただけだけど）

「俺を誘うなんて、輪廻転生しても経験知がたりねぇよ！」

そのまま　フンッ　っといって後ろを振り返り去って行く女美さん。そのとき…僕はみたんだ…。不良リーダーが立ち上がるのを。そして、そのまま女美さんに殴りかかるのを。

「このっ…！甘く見るなぁ！！」　ゴッ

だから…女美さんが後ろから殴られるのをみていられなくて…僕が飛び出したんだ…

最後に僕が見たのは…おどろいた顔をした女美さんだった…

▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽

美女視点

「おいっ！お前！お前！おきろって！」

「そいつは気絶してるぜ。嬢ちゃん」

気絶しているのはわかる。だが、なぜ俺を庇ったのかがわからない。こんなひどいやつなのに…

「邪魔者はいなくなったし、嬢ちゃんを倒して無理やりつれていくぜ」

そういう不良に、俺は鳥肌がたった。

――――またやっちまったか――――

俺はそう思い、喧嘩をするために【アレ】を取り出した。…本当は使いたくなかったんだが…

「おっ、お前…もしかしてお前は…―『紅桜』！？」

そう。俺が【アレ】といったのは、紅桜。正式に言うと、俺は紅桜じゃない。呼ばれているのは俺の持っている木刀。俺からはふったことがないのだが、なぜか喧嘩をふられ、それをすべてかっていたらいつの間にかこんな異名がついたのだ。

この異名をといつめたら、木刀が紅いから、いままでに倒した人の血ということらしい。

【妖樹　紅桜】死人の血を吸って紅い桜の花を咲かす樹。これが元らしい。

閉話休題《それはおいといて》

「さあ、血啜時間《ティータイム》の始まりだ…！！」

▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△

俺は、あいつらを倒したあと、こいつを背負って帰り道を歩いていた。

そして…考えるのはこいつが何故庇ったのか。

こいつを背負いながら考えていると、こいつが目を覚ました。

「う……ん？ここ…は……」

「今、お前を背負って帰っているところだ。」

そうすると、あわてて俺の背中から降りようとするこいつ。

「ちょっ、降ろし…ねぇ、これってなに？」

「！？おまっ、それ返せ！」

あわてたときに見つけたのか、紅桜を手にするこいつ。俺がいつも返せというと、いつも普通に返すのに、なぜか返さないこいつ。…頭でも打ったか？

「ねぇ、女美さん…この木刀…なんていうの？」

「だから、かえ……は？」

「この木刀、名前とかないの？」

「え？いや、紅桜ってのがあるけど…どうして名前？」

「そっか…この木刀、紅桜っていうのか…いい名前だね」

そういって、紅桜を見つめるこいつ。それを聞いたと同時に、俺に安堵感が襲ってきた。

…もしかして俺は…こいつを試してたのかもな。中学の奴等みたいに裏切らないかどうかを。

ドサッ

俺は、そう思ったと同時に、背中にいるこいつをおろした

「いたっ！女美さん…いきなりおろさないでよぅ……」

「もうおきたんだからいいだろ。それと、これは俺のもんだ」

そういって、こいつから紅桜を奪い取る。…いままで忌々しかったが、これからは好きになれそうだ…

こいつのおかげっていうのがちょっと気に食わないがな。

「早く来ないと置いてくからな！善！！」

「？…わわっ！まってよ～！」

なにかに気づきそうだった善が、慌てて女美の後をついていく。

その女美が持っている紅桜は、夕日をあびて、きれいな紅に光っていた。

ティータイムの…始まりです…♪　ｂｙ紅桜（後書き）

前と違って長いって？気のせいです。

自分と蒼の間では、女美さんは最初の後、普通に善と呼んでいるのですが、
奴隷一号から善に行くにはなにかエピソードがないとな～
と考えたのがこれでした。
木刀は最初から持っていたので、それにまつわるエピソードを考えました。
スケットダンスのヒメコのエピソードも考えるヒントになりました。
ありがとうございます。

次回は、三人組の三人目が出てきます。期待しててください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1439ba/

美女に勝てない善人

2012年1月5日00時46分発行